

都道府県別賞一等

あーちゃんの「思いやり」

岐阜県 各務原市立鶴沼中学校 二学年

平田 菜々花

希少ガンが見つかり、抗ガン剤治療を始めた祖母のあーちゃんは、母に手紙を差し出した。

「何かあった時のために。」  
と。しかし、母はそれを受け取らなかった。

あーちゃんは、七十五歳を過ぎても幼稚園で働き、毎週ジムに通っていた。いつも若々しく、私に「おばあちゃん」と呼ばれるのを嫌がった。そんなあーちゃんがガンを患い、余命わずかだと知った時は、自分の耳を疑った。心臓が飛び出そうになるくらい驚いた。

ガンが見つかって九カ月後、あーちゃんは亡くなった。お葬式当日、あーちゃんの家を訪れた私たちは、棺に入れる物と、母が受け取らなかった手紙を探していた。しかし、出てきたのは大好きだったパンダのグッズばかり。皆が、手紙は見つからないと諦めかけた時、私は茶封筒を見つけた。恐る恐る開けてみると、二枚の便箋が入っていた。一枚は、母と叔母への感謝の言葉が、もう一枚は、お葬式の指示が書かれていた。ごくごく身内で、BGMはピアノ曲で、最後に一人ずつ手紙を書いて読んでほしい……。世話焼きなあーちゃんらしさが溢れていた。

『あーちゃんにとつて幸せな送り出しができるだろうか。』

そんな不安が消えた。そして、何だか心が温かくなった。それは、皆同じだったのだろう。張り詰めた空気がゆるみ、思い出話が飛び交うようになっていた。

手紙に書かれたお葬式の指示のように、何かあった時への備えは、あーちゃんの優しい「思いやり」だったのだと思う。保険もその一つだ。あーちゃんは九カ月間、入院を繰り返していた。そのため、治療費や家に設置する福祉用具等の費用も必要だった。あーちゃんの家にはローンも残っていた。それらを全て合わせると、かなり高額である。私は気になったので、

「入院費とか家のローンとか、どうするの。」  
と、母に尋ねた。すると、

「大丈夫。あーちゃんが入っていた保険のおかげで全部払えたよ。あーちゃんは、『何かあった時に子どもたちが困らないように。』って、保険に入って備えてくれていたの。さすがあーちゃんだね。」

と言った。私はそれを聞き、まさに『備えあれば憂いなし』だと思った。

## 第59回中学生作文コンクール

大きな病気になったことがないから自分は大丈夫だと思ったり、事件や事故のニュースを他人事のように見たりしている人は多いだろう。しかし実際は、私たちの生活は危険と隣合わせである。それらが、いつ自分の身にふりかかってくるかも分からない。そして、万が一自分に何か起きた時には、周りの人に迷惑や心配をかけてしまう。だから、もしもの時に備えることは、家族や友達、将来の自分への「思いやり」なのだ。保険は、そんな「思いやり」が集まって成り立っているものだと思う。皆がそれぞれの将来に備えることで、誰かを助けることも、助けってもらうこともできる。

私は、生命保険や医療保険、学資準備のための保険に生まれた時から加入しているそうだ。中学生になり、自転車保険にも入った。しかし、大きなケガや病気をしたことがなく、保険についてあまり理解していなかった。今回の体験は、身の周りにひそむ危険やそれに備える大切さを学び、保険について考えるきっかけになった。大人になった時、病気やケガのリスクは今より増すだろう。そして、両親の手を借りず、それに備えなければいけない。私は、将来の仕事や住む場所に合った保険を選ぶよう、身の周りにおけるリスクや保険の種類を知っておこうと思う。そして、何かあった時への備えは、自分や周りの人への「思いやり」であることを忘れないようにしたい。あーちゃんのように。